



TITLE:

自由:10 ヤクシマザルの糞と頬袋による種子散布の効果の違い(III 共同
利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

野間, 直彦; 湯本, 貴和

CITATION:

野間, 直彦 ...[et al]. 自由:10 ヤクシマザルの糞と頬袋による種子散布の
効果の違い(III 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1995, 25:
92-93

ISSUE DATE:

1995-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164674>

RIGHT:

ンと周囲の個体関係から分析する。また採餌時の周囲の反応については、観察個体と他個体との攻撃行動と排除行動から分析する。

以上の観点および方法で研究は行われている。高崎山では、一日の餌をコムギなどの人工餌と森の自然餌から得ている。これまで高崎山の出産個体は、非出産個体に比べて人工の餌から約90~100kcal /日多く摂取していることが確かめられている。繁殖状態のエネルギー要求量の増加分を考えると、この値は、すでに知られているアカゲザルのものと比べると少なすぎると思われる。そのため出産個体と非出産個体の間で、一日の自然餌からの摂取エネルギーの違いを調査中である。自然餌からの摂取量について、詳しい栄養分析を行っていないが、両者の間に多少の差が認められた。また、同一個体を2年追跡しているなかで、出産した年と出産しなかった年の個体の摂取量には明らかに差がみられている。両年の人工餌場での採餌時の行動を比べると、観察個体は出産した年にエサの多くまかれた場所で採食していることから、出産期に積極的行動を示している傾向がうかがえた。さらに出産した年の観察個体に対する周囲の反応は、出産しなかった年に比べて、積極的な行動を示し始めた時期に他個体からの排除行動および攻撃行動の頻度がやや高かった。

自由：9

五木村と相良村におけるサルの伝承や禁忌の比較研究（その2）

藤井尚教（尚絅大・心理）

1992年から熊本県球磨郡相良村で、1993年からは隣の五木村で、サルと人との関わりを、サルに関する伝承や禁忌について面接調査を行ってきた。今回その2の報告をする。

「サル」は山言葉として両村で禁忌である。

サル殺しの禁忌は相良村で非常に強くしかも隠された形で存在していたが、五木村では西日本に存在する一般的なものであった。

サル肉を食べる話は両村で得られたが、サル殺しの禁忌が存在する地域でサル肉食が行われているという矛盾は案外普遍的事実のようである。

サルの黒焼きについての詳細な話や関係者が、相良村では残っているが、五木村では簡単な噂だけしか得られなかった。

最大の関心事であったサルの手について 五木村で1994年度に新しく2例のサルの手を見つけ出した。その一つは玄関の柱に左手が糸で結んでぶら下げてあり、魔除けあるいは泥棒よけであった。もう一つは、前年に左右二本のサルの手が馬小屋の柱に打ち付けてあるのを見つけた同じ集落で、馬小屋の柱に左手を釘で打ち付けてあった。これは、魔除け、特に犬神よけであった。

馬小屋の表の柱にサルの手が打ちつけて魔除けにした例は、馬や牛の繁殖を願う厩猿の一例であり、相良村ではそれはすべてサルの頭蓋骨であったが、五木村ではサルの手が使われていて、他にもいく例があったようである。サルの手を厩猿とする用法は相良村ではすでに消え、五木村で残存してきたのであろう。しかもその牛馬の出産において危害をあたえる〈魔〉として五木村では犬神が想定されていたことが理解された。

サルの手の使用目的として、魔除け（熱病治しを含む）、河童よけ、失せ物探し（泥棒よけを含む）、人の安産、厩猿、家畜の売買、招福の宝物があげられ、その設置あるいは保管場所として、玄関、馬牛小屋、箱に入れて大切に保管の3タイプがあった。厩猿は五木村のみであったが、右手よりも左手がその効能は大きいといわれる点は共通であった。

この調査で、サルに関する禁忌を受け入れる人々の心理に、同時に〈魔の受容〉という心性が存在していることに気付かされた。

自由：10

ヤクシマザルの糞と頬袋による種子散布の効果の違い

野間直彦（森林総合研究所九州支所）

湯本貴和（京都大学生態学研究センター）

霊長類の種子散布は、従来糞による散布だけが注目されてきたが、頬袋を持つ旧世界ザルの場合には、そこにいったん果実をつめたのちに種子を吐き出す「頬袋散布」がかなり効果的であることが明らかになってきた。本研究では、屋久島の照葉樹林に生息するヤクシマザル *Macaca fuscata yakui* が関与する種子散布の、糞と頬袋による効果の違いを比較した。

屋久島研究林の人づけされた群れで1頭の個体を連続して追跡し、どこで果実を食べたかを記録

するとともに、その個体の糞、あるいは吐き出しを場所と時刻を特定できるように記録しながら、採集した。サルが散布した種子は植木鉢にまいて、発芽率を比較した。

初夏と冬に行った調査期間中にサルが果実を利用した液果のうち、比較的大きな種子を持つタブノキ *Persea thunbergii* (初夏)、シロダモ *Neolitsea sericea*、アデク *Syzygium buxifolium* (冬) ではほとんど全ての種子が無傷で吐き出された。サルが十分噛み割れる硬さのものも含まれるが、飲み込みにくい大きさであること、種子内部に毒を持っていることが考えられる。頬袋散布により種子が落とされる場所は、サルが休憩しながら頬袋の中の果実を食べる場所に規定され、大部分は母樹の下かその近くであった。散布された種子を播くと、どの種も果肉つきで播いた場合よりよく発芽した。

ヤマモモ *Myrica rubra* は初夏に熟し、頬袋と糞の両方の散布が見られた。頬袋散布の様式は上記の3種と同様であった。糞による散布は数時間から半日後に排出されるものと推定され、遊動域の全域が潜在的に散布可能であり、母樹からの移動距離は頬袋による場合よりはるかに長くなる。散布された核を播くと発芽率は頬袋93%、糞71%で、頬袋の方がややよかった。

初夏に熟すシマグワ *Morus australis* とホウロクイチゴ *Rubus sieboldii* の直径約2mmの種子と核は全て糞により散布されている。サルの糞から得られたものを播くとよく発芽した。小さな種子は、噛み割られることなく飲み込まれることを可能にしていると考えられる。

自由: 11

金華山における野生ニホンザルの採食行動の群間比較

田中 香 (京都大学霊長類研究所)

野生状態では、ニホンザルの採食行動は、食物パッチの大きさ、質、量、あるいは伴食個体の構成により決定されていると考えられる。そこで、本研究では、採食内容、活動時間割合、移動様式が、食物の分布様式とその量によってどのように異なってくるか、隣接する2群間で比較した。

調査は、宮城県牡鹿郡牡鹿町金華山島でおこなった。金華山は、面積約10km²の島で、約280頭余り

の野生ニホンザルが6群に分かれて、各々の遊動域を異にして生息している。島内でも、地域によって植生がわずかずつ異なるため(例えば北斜面と南斜面の違い)、群によって個体の採食様式が異なるものと考えられる。そこで、植生の違いによる採食行動の違いを明らかにするために、まずは異なる群に属する個体間で採食行動の比較をおこなった。各群から中順位オトナメスを2頭ずつ選び、個体追跡法によって以下の行動を記録した。
1) 一日のうちに、採食、休息、移動の各行動に費やす時間、採食内容と採食量、及び、2) 採食をおこなった場所(地図上に記録し、相対的な大きさと質を記録する)、同じ場所で採食をおこなっている他個体の構成、3) 一日の遊動距離と、採食をおこなった場所間の距離、季節毎の遊動域の広さ。

現在以上のことを群間で季節ごとに比較し、解析をおこなっている。これらのことをもとに、ニホンザルの個体の採食行動を変える要因を食物の分布様式という面から探り、環境と行動の関係を明らかにする材料としたい。

自由: 12

生息地の人為的攪乱とその後の再生がヤクシマザルの生態と分布に与える影響

David A. Hill

(京大・理 京都大学招へい外国人学者)

A study was initiated on the influence of habitat disturbance, through logging and conifer plantations, on the distribution and diet of Japanese macaques (*M. fuscata yakui*) in the lowland forests of Yakushima, Kagoshima-ken. Census data were collected synchronously at four sites on three to four days of each week by a team of volunteer assistants. The sites, which were all at similar altitudes (300-800m asl), represented a range of logging pressure. Faecal samples were also collected at each site. These were oven dried and analyzed used to assess inner-site differences in diet. The vegetation composition of the forest was measured using 20x20m quadrats. The assistants were trained by myself and N. Agetsuma from May to July 1994 and systematic data collection